

岡病防第 11 号  
平成25年 6 月28日

各関係機関長 殿

岡山県病虫害防除所長  
(公印省略)

病虫害発生予察情報について

病虫害発生予報第4号を下記のとおり発表したので送付します。

平成25年度病虫害発生予報第4号

平成25年 6 月28日  
岡 山 県

予 報 概 評

作物名	病虫害名	発生時期	発生量
水 稻	葉いもち	—	やや多
	穂いもち	並	並
	紋枯病	やや早	並
	ヒメトビウンカ	—	並
	縞葉枯病	—	並
	ツマグロヨコバイ	—	並
	ニカメイガ	—	並
	セジロウンカ	—	やや多
	トビイロウンカ	並	並
	斑点米カメムシ類	—	やや多
モ モ	せん孔細菌病	—	並
	灰星病	やや遅	やや少
	モモハモグリガ	遅	並
	ナシヒメシンクイ	—	並
	ハダニ類	—	やや多
ブドウ	晩腐病	—	並
	べと病	遅	やや少
	うどんこ病	やや遅	やや少
	フタテンヒメヨコバイ	並	やや少
	チャノコカクモンハマキ	並	並
果樹共通	カメムシ類	—	少
キュウリ	べと病	—	やや多
	うどんこ病	—	並
	褐斑病	—	やや少
	炭疽病	やや遅	やや少
キュウリ・ナス	ミナミキイロアザミウマ	—	並
トマト	疫病	—	並
	葉かび病	—	やや多
(アブラナ科野菜) ダイコン	軟腐病	—	やや多
	キスジノミハムシ	—	並
	コナガ	—	少
野菜共通	ハスモンヨトウ	並	やや少
	アブラムシ類	—	並
	モザイク病	—	並
キ ク	白さび病	—	やや少
	ハダニ類	やや遅	やや少
	アブラムシ類	並	並

1. 普通作物

(水 稲)

(1) 葉いもち

予報内容

発生量 やや多

予報の根拠

ア. 6月20～21日の巡回調査によると、本田での発生圃場率は2.6%で平年(2.3%)並であった。

イ. BLASTAM-メッシュ岡山版(以下、ブラスタム)による葉いもちの感染好適条件は、6月21日及び22日に県内で広域的に出現した。また、県北部及び中部の一部地域では、6月19日から25日まで連続した感染好適条件が出現した。ブラスタムの最新結果は下表のとおりである。

ウ. 6月21日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年より多いとされており、発病をやや助長する条件である。

防除上の参考事項

ア. 補植用の苗は、伝染源となるので処分する。

イ. 箱処理剤をしていない圃場では、発生を確認後は速やかに防除を行う。箱処理剤を使用している圃場では、箱処理剤と同系統の薬剤の使用を避ける。

ウ. 現時点で未発生圃場でも耐病性の弱い品種(コシヒカリ、あきたこまち、ヒノヒカリ、朝日)は初発後の病勢の進展が速いので、早期発見、早期防除に努める。

エ. 本病は、曇雨天日が多い場合に発病が助長されるので今後の気象に注意する。

オ. 平成25年度植物防疫情報第2号(平成25年4月18日発表)「ストロビルリン系殺菌剤(QoI剤)耐性イネいもち病菌の発生防止について」参照。

表 アメダスデータから推測される葉いもちの感染好適条件の出現状況

(BLASTAMメッシュ岡山版)

月・日	北部地帯					中部地帯					南部地帯				
	上長田	千屋	奈義	古町	新見	久世	津山	福渡	和気	高梁	岡山	虫明	倉敷	笠岡	玉野
6. 15	●	●	●	●	●	●	●	—	—	—	—	—	—	—	—
16	—	—	—	●	●	—	—	○	—	—	○	—	—	—	—
17	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
18	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
19	●	●	●	●	—	●	●	—	—	—	—	—	—	—	—
20	●	●	●	●	●	●	●	—	—	—	—	—	—	—	—
21	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	○	●	○	●	—
22	○	○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	—
23	—	—	●	—	—	—	●	—	—	●	—	—	—	—	—
24	○	○	●	○	○	●	●	●	—	—	—	—	—	—	—
25	○	—	●	—	—	—	●	—	—	—	—	—	—	—	—
26	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

●：感染好適条件 ○：準感染好適条件 —：感染好適条件は現れなかった

(2) 穂いもち(極早生種対象)

予報内容

発生時期 並

発生量 並

予報の根拠

ア. 極早生種の生育はほぼ平年並である。

イ. 6月20～21日の巡回調査では、県北部及び中部において葉いもちの発生は認め  
ていない。

ウ. BLASTAM-メッシュ岡山版（以下、ブラスタム）による葉いもちの感染好適  
条件は、6月21日及び22日に県内で広域的に出現した。また、県北部と県中部の  
一部地域では、6月19日から25日まで比較的連続して感染好適条件が出現した。

エ. 6月21日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は平年より高く、  
降水量は平年より多いとされており、発病をやや助長する条件である。

#### 防除上の参考事項

ア. 本病は、曇雨天日が多い場合に発病が助長されるので今後の気象に注意する。

イ. 平成25年度植物防疫情報第2号（平成25年4月18日発表）「ストロビルリン系  
殺菌剤（QoI剤）耐性イネいもち病菌の発生防止について」参照。

### （3）紋枯病

#### 予報内容

発生時期 やや早

発生量 並

#### 予報の根拠

ア. 6月20～21日の巡回調査では、平年同様発生を認めなかった。

イ. イネの茎数は平年並である。

ウ. 前年の発生は平年より少なかったため、越冬菌密度も平年より少ないと考えら  
れる。

エ. 6月21日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は平年より高く、  
降水量は平年より多いとされており、発病を助長する条件である。

### （4）ヒメトビウンカと縞葉枯病

#### 予報内容

ヒメトビウンカ（第2世代幼虫）

発生量 並

縞葉枯病

発生量 並

#### 予報の根拠

ア. 赤磐市の予察灯における第1世代の初飛来は6月11日で平年（6月10日）並で、  
6月1～5半旬の飛来数は9頭で、平年（12.3頭）よりやや少なかった。

イ. 6月20～21日の巡回調査におけるすくい取り調査（20回振り）による発生圃場  
率は48.1%で平年（50.3%）並で、1地点あたりの成幼虫発生量は3.7頭で平年  
（1.9頭）よりやや多かった。

ウ. 縞葉枯病の媒介虫であるヒメトビウンカの県予察圃場における今年の保毒虫率  
は11.0%と平成24年までの過去10年間（平成16～20年は欠測）の平均保毒虫率（3.5  
%）より高かった。

エ. 近年の県南部における縞葉枯病の発生は、平年並で推移している。

### （5）ツマグロヨコバイ

#### 予報内容

ツマグロヨコバイ（第2世代幼虫）

発生量 並

ア. 赤磐市の予察灯における第1世代の初飛来は6月8日で平年（6月6日）並、  
6月1～5半旬の飛来数は73頭で、平年（240.7頭）より少なかった。

イ. 6月20～21日の巡回調査における見取り・払い落とし調査による発生圃場率は  
13.2%で平年（11.0%）並であった。

ウ. 6月20～21日の巡回調査におけるすくい取り調査（20回振り）では、成幼虫の  
発生量は0.8頭で平年（1.2頭）並であった。

エ. 6月21日の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は高く、降水量は平年より多いとされており、本虫の増殖を特に助長する条件ではない。

#### 防除上の参考事項

ア. ツマグロヨコバイが媒介する萎縮病は、近年少発生が続いている。

#### (6) ニカメイガ（第1世代幼虫）

予報内容

発生量 並

予報の根拠

ア. 赤磐市のフェロモントラップにおいて6月5半旬までに平年同様誘殺を認めていない。

#### (7) セジロウンカ

予報内容

発生量 やや多

予報の根拠

ア. 赤磐市の予察灯における初飛来は5月30日で平年（6月12日）より早く、6月1～5半旬の飛来数は7頭で、平年（15.9頭）より少なかった。

ウ. 6月20～21日の巡回調査におけるすくい取り調査（20回振り）では、1地点あたり成虫発生量は4.3頭で平年（0.6頭）より多かった。

エ. 6月21日の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は高く、降水量は平年より多いとされており、本虫の増殖を特に助長する条件ではない。

#### (8) トビイロウンカ

予報内容

発生時期 並

発生量 並

予報の根拠

ア. 赤磐市及び真庭市の予察灯において6月5半旬までに飛来を認めていない。

イ. 6月20～21日の巡回調査において発生を認めなかった。

#### (9) 斑点米カメムシ類（アカスジカスミカメ）

予報内容

発生量 やや多

予報の根拠

ア. 赤磐市の予察灯における6月1～5半旬の誘殺数は97頭で平年（65.7頭）よりやや多かった。

イ. 6月20～21日の県北部イネ科牧草地のすくい取り調査（20回振り）では、アカスジカスミカメの発生量は1地点当たり72.6頭で平年（22.1頭）より多かった。

ウ. 6月21日の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は高く、降水量は平年より多いとされており、本虫の増殖を特に助長する条件ではない。

#### 防除上の参考事項

ア. イネ科植物の穂は餌であり、産卵場所でもあるため、水田周辺のイネ科植物は除去する。ただし、穂の付いたイネ科植物をイネの出穂2週間前から出穂後3週間の間に除去すると、カメムシを水田に追いやることになるので避ける。

## 2 果 樹

(モ モ)

#### (1) せん孔細菌病

予報内容

発生量 並

予報の根拠

ア. 6月17日の巡回調査によると、発生圃場率は16.2%で平年(20.3%)よりやや少なかった。

イ. 6月21日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年より多いとされており、降水量が多い場合は発病を助長する条件となる。

防除上の参考事項

ア. 風雨によって発病が助長されるので、今後の気象に注意する。

(2) 灰星病

予報内容

発生時期 やや遅

発生量 やや少

予報の根拠

ア. 県予察圃場における幼果の発病果率は3.0%で、平年(6.6%)より少なかった。

イ. 6月17日の巡回調査では、果実での発生は認めていない。

ウ. 6月21日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年より多いとされており、降水量が多い場合は発病を助長する条件となる。

(3) モモハモグリガ(第3世代幼虫)

予報内容

発生時期 遅

発生量 並

予報の根拠

ア. 赤磐市のフェロモントラップにおいて第2世代成虫の初飛来を認めておらず、発生時期は平年(6月12日)より遅かった。

イ. 赤磐市のフェロモントラップにおける6月1～5半旬の誘殺数は0頭で、平年(81.4頭)より少なかった。

ウ. 6月18日の巡回調査における発生圃場率は5.4%で、平年(3.5%)よりやや多かった。

エ. 6月21日の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は高く、降水量は平年より多いとされており、本虫の増殖を特に助長する条件ではない。

防除上の参考事項

ア. 平成25年度植物防疫情報第4号(平成25年5月27日発表)「岡山県南部におけるモモハモグリガの発生状況」参照。

(4) ナシヒメシンクイ(第3世代幼虫)

予報内容

発生量 並

予報の根拠

ア. 赤磐市のフェロモントラップにおける6月1～5半旬の誘殺数は8頭で、平年(20.4頭)より少なかった。

イ. 6月17日の巡回調査における新梢被害の発生圃場率は16.2%で、平年(17.0%)並であった。

ウ. 6月21日の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は高く、降水量は平年より多いとされており、本虫の増殖を特に助長する条件ではない。

(5) ハダニ類

予報内容

発生量 やや多

予報の根拠

ア. 6月17日の巡回調査における被害発生圃場率は24.3%で、平年(15.5%)よりやや多かった。

イ. 6月21日の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は高く、降水量は平年より多いとされており、本虫の増殖を特に助長する条件ではない。

(ブドウ)

(1) 晩腐病

予報内容

発生量 並

予報の根拠

ア. 6月の降水量は全般的に平年よりやや少なかったことから、幼果の感染も平年よりやや少ないと考えられる。

イ. 6月21日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年より多いとされており、降水量が多い場合は発病を助長する条件となる。

(2) ベと病

予報内容

発生時期 遅

発生量 やや少

予報の根拠

ア. 県予察圃場（ネオマスカット）における発生は認めていない（初発生確認の平年値：6月第2半旬）。

イ. 6月17日の巡回調査において発生圃場率は0%で、平年（10.8%）より低かった。

ウ. 6月21日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年より多いとされており、降水量が多い場合は発病を助長する条件となる。

防除上の参考事項

ア. 梅雨時期の連続降雨により急に病勢が進展する可能性があるので注意する。

イ. ブドウベと病に登録のあるストロビルリン系及び作用点が同一の殺菌剤（アゾキシストロビン剤、クレソキシムメチル剤、ファモキサドン剤）に対する耐性菌が本県の一部で確認されている。本系統の殺菌剤の使用は1作期1回とし、他系統の殺菌剤とできるだけ組み合わせて使用する。

(3) うどんこ病

予報内容

発生時期 やや遅

発生量 やや少

予報の根拠

ア. 6月17日の巡回調査において、トンネル被覆栽培での発生を認めていない。

イ. 6月21日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年より多いとされており、降水量が多い場合は発病を抑制する条件となる。

(4) フタテンヒメヨコバイ（第2世代幼虫）

予報内容

発生時期 並

発生量 やや少

予報の根拠

ア. 6月17日の巡回調査において発生は認められず、平年（1.3%）より低かった。

イ. 6月21日の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は高いとされており、本虫の増殖を助長する条件である。

(5) チャノコカクモンハマキ（第2世代幼虫）

予報内容

発生時期 並

発生量 並

予報の根拠

ア. 赤磐市のフェロモントラップにおける6月1～5半旬の誘殺数は3頭で、  
（2.1頭）並であった。

イ. 6月17日の巡回調査において同年同様発生を認めなかった。

ウ. 6月21日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は  
同年より高く、本虫の増殖を助長する条件である。

（果樹共通）

（1）カメムシ類（チャバネアオカメムシ）

予報内容

発生量 少

予報の根拠

ア. 赤磐市の予察灯における6月1～5半旬のチャバネアオカメムシの誘殺数は、  
5頭で同年（100.8頭）より少なかった。

イ. 6月21日の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は高いとされており、  
本虫の増殖を助長する条件である。

3. 野菜

（キュウリ）

（1）べと病

予報内容

発生量 やや多

予報の根拠

ア. 県予察圃場（5月13日定植）において、発病葉率は41.8%で同年（10.1%）より  
高かった。

イ. 6月26～27日の巡回調査によると、発生圃場率は83.3%で同年（50.4%）より  
高かった。

ウ. 6月21日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は同年より高く、  
降水量は同年より多いとされており、発病を助長する条件ではない。

（2）うどんこ病

予報内容

発生量 並

予報の根拠

ア. 県予察圃場（5月13日定植）において、発病葉率は0%で同年（1.3%）より  
低かった。

イ. 6月26～27日の巡回調査によると、発生圃場率は58.3%で同年（44.2%）より  
やや高かった。

ウ. 6月21日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は同年より高く、  
降水量は同年より多いとされており、発病を抑制する条件である。

（3）褐斑病

予報内容

発生量 やや少

予報の根拠

ア. 県予察圃場（5月13日定植）において、発病葉率は0%で同年（0%）並であ  
った。

イ. 6月26～27日の巡回調査では発生を認めず、同年（27.3%）より低かった。

ウ. 6月21日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は同年より高く、

降水量は平年より多いとされており、発病を助長する条件である。

(4) 炭疽病

予報内容

発生時期 やや遅

発生量 やや少

予報の根拠

ア. 県予察圃場（5月13日定植）において、発病葉率は0%で平年（0%）並であった。

イ. 6月26～27日の巡回調査では発生を認めず、平年（7.0%）より低かった。

ウ. 6月21日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年より多いとされており、発病を助長する条件である。

(キュウリ、ナス)

(1) ミナミキイロアザミウマ

予報内容

発生量 並

予報の根拠

ア. 6月26～27日の巡回調査によると、露地、施設栽培のナス及びキュウリでの発生量は平年並であった。

イ. 6月21日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年より多いとされており、特に発生を助長する条件ではない。

(トマト)

(1) 疫病

予報内容

発生量 並

予報の根拠

ア. 県予察圃場（5月7日定植）において、発病葉率は0%で平年（0%）並であった。

イ. 6月26～27日の巡回調査によると、発生圃場率は11.1%で平年（2.4%）より高かった。

ウ. 6月21日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年より多いとされており、発病を助長する条件ではない。

(2) 葉かび病

予報内容

発生量 やや多

予報の根拠

ア. 県予察圃場（5月7日定植）において、発病葉率は0%で平年（0.2%）並であった。

イ. 6月26～27日の巡回調査によると、発生圃場率は33.3%で平年（23.5%）よりやや高かった。

ウ. 6月21日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年より多いとされており、発病を助長する条件である。

防除上の参考事項

ア. 本病の初発生時期（雨除け栽培トマトでは6月下旬～7月上旬）と病勢進展時期（7月下旬～8月上旬）に効果の高い殺菌剤を予防散布する防除体系は、葉かび病の防除に有効である。

イ. 一部地域で Cf-9 を持つ抵抗性品種を侵すレースが確認されているので、発生を認めた場合には速やかに防除対策をとる（平成22年度植物防疫情報第4号参照）。

ウ. 本県では、トマト葉かび病に類似した病徴を示すトマトすすかび病の発生が認められている（平成18年度病害虫発生予察特殊報第2号参照）。肉眼ではこれら

病害の判別は困難であるが、顕微鏡下で観察すれば、トマトすすかび病菌の分生子が細長い形状であることから葉かび病とは容易に区別できる。

(アブラナ科野菜)

(1) ダイコン軟腐病

予報内容

発生量 やや多

予報の根拠

ア. 6月21日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年より多いとされており、発病を助長する条件である。

(2) キスジノミハムシ

予報内容

発生量 並

予報の根拠

ア. 6月21日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年より多いとされており、特に発生を助長する条件ではない。

(3) コナガ

予報内容

発生量 少

予報の根拠

ア. 6月1～5半旬の県予察圃場(赤磐市)におけるフェロモントラップへの誘殺数は0頭で、平年(36.8頭)より少なかった。

イ. 6月21日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年より多いとされており、特に発生を助長する条件ではない。

(野菜共通)

(1) ハスモンヨトウ

予報内容

発生時期 並

発生量 やや少

予報の根拠

ア. 6月1～5半旬の県予察圃場(赤磐市)のフェロモントラップの誘殺数は43頭で、平年(55.0頭)より少なかった。

イ. 6月26～27日の巡回調査によると、ナス、トマト、キュウリでの発生は認められず、発生圃場率は平年(0%)並であった。

ウ. 6月21日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年より多いとされており、特に発生を助長する条件ではない。

(2) アブラムシ類とアブラムシ伝搬性のモザイク病

予報内容

発生量 アブラムシ類 並  
モザイク病 並

予報の根拠

ア. 6月1～5半旬の県予察圃場(赤磐市)の黄色水盤への飛来数は275頭で、平年(315.1頭)並であった。

イ. 県予察圃場(赤磐市)における6月下旬のキュウリ、トマトでのアブラムシ類の発生量は平年並であった。モザイク病は、平年同様発生を認めなかった。

ウ. 6月26～27日の巡回調査によると、キュウリ、トマトのアブラムシ類の発生量は平年並であった。モザイク病の発生圃場率は、キュウリでは0%で平年(5.7%)より低く、トマトでは44.4%で平年(8.5%)より高かった。

エ. 6月21日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年より多いとされており、特に発生を助長する条件ではない。

#### 防除上の参考事項

ア. モザイク病の発病株は伝染源になるので早めに除去し、アブラムシ類の防除を行う。

#### 4. 花 き

(キ ク)

##### (1) 白さび病

予報内容

発生量 やや少

予報の根拠

ア. 6月26～27日の巡回調査によると、発生圃場率は6.7%で平年(28.3%)より低かった。

イ. 6月21日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年より多いとされており、発病を助長する条件ではない。

##### (2) ハダニ類

予報内容

発生時期 やや遅

発生量 やや少

予報の根拠

ア. 6月26～27日の巡回調査では発生を認めず、発生圃場率は平年(16.7%)より低かった。

イ. 6月21日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年より多いとされており、特に発生を助長する条件ではない。

##### (3) アブラムシ類

予報内容

発生時期 並

発生量 並

予報の根拠

ア. 6月1～5半旬の県予察圃場(赤磐市)の黄色水盤への飛来数は275頭で、平年(315.1頭)並であった。

イ. 6月26～27日の巡回調査によると、発生圃場率は11.8%で平年(14.0%)並であった。

ウ. 6月21日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年より多いとされており、特に発生を助長する条件ではない。

この情報は、岡山県病害虫防除所ホームページでも公開しています。アドレスは、  
[http://www.pref.okayama.jp/soshiki/kakuka.html?sec\\_sec1=239](http://www.pref.okayama.jp/soshiki/kakuka.html?sec_sec1=239) です。